

《研究資料》

# 中学生の剣道人口の増加を図るための一考察 —球技種目に類似した教材から—

井口 清・柴田 一浩

A Study on Methods to Increase the Number of Junior High School Students Who Play Kendo  
— From the Perspective of Teaching Materials Similar to Ball Sports Events —

Kiyoshi IGUCHI, Kazuhiro SHIBATA

キーワード：剣道人口，類似教材，教具

Key Words: Kendo Player Population, Similar teaching materials, Teaching tools

## 要旨

公益財団法人日本中学校体育連盟は，2024年6月8日，主催する全国中学校体育大会の規模を2027年度から縮小することを明らかにした。夏季と冬季の計19競技のうち，水泳，ハンドボール，体操，新体操，ソフトボール（男子），相撲，スキー，スケート，アイスホッケーの9競技が開催されなくなることとなった。

そこで，日本中体連の調査結果や先行研究をもとに剣道の現状を把握することとした。中学生の剣道人口を増加させるためには，小学校学習指導要領に位置付ける必要があるため，新たに位置付けられたタグラグビーなどの下位教材としての有効性について検討した。また，部活動加入率が減少している競技団体の取り組みなどから，体育授業で取り組める簡易な教具の開発と，攻防の楽しさを味わわせる教材の普及が必要との見解に至った。

## 1 問題の所在と研究の目的

公益財団法人日本中学校体育連盟（以下「日本中体連」という）は、2024年6月8日、主催する全国中学校体育大会（以下「全中大会」という）の規模を2027年度から縮小することを明らかにした。夏季と冬季の計19競技のうち、水泳、ハンドボール、体操、新体操、ソフトボール（男子）、相撲、スキー、スケート、アイスホッケーの9競技が開催されなくなることとなった。

新聞報道<sup>1)</sup>によると、1979年から始まった全中大会について、日本中体連では見直しを進めてきた結果、少子化で部の設置率が低い競技が生じていること、夏季競技できめ細かな暑熱対策が不可欠であること、大会運営に関わる教員の負担軽減、部活動の地域移行の推進に伴って地域クラブの大会参加が始まったことなどが背景にある。検討した結果、22年度に部活動設置率が男女とも20%を下回っていた競技を、原則として縮減することとした。継続させるのは陸上競技、バスケットボール、サッカー、軟式野球、バレーボール、ソフトテニス、卓球、バドミントン、柔道、剣道、ソフトボール（女子）の11競技にした。ソフトボールの女子については、設置率は19%だが部活動在籍数が25,000人を超えることから残したとのことである。

剣道についてしてみると、公益財団法人全日本剣道連盟（以下「全剣連」という）は、2020年4月に、基本計画「次世代への継承に向けて」<sup>2)</sup>の中で、「日本中体連の資料などによると、直近18年間で子供の数は約2割減少しているのに対し、剣道の生徒数がほぼ半減と、子供の減少率を大幅に上回っている。特に剣道は少年少女人口を増やしていくための取り組みは喫

緊の課題」と危機感を募らせている。この問題については、普及部会と学校教育部会が、それぞれ「課題解決のための戦略及び実行計画」を立てて取り組んでいる。

しかしながら、日本中体連調査によると、男子については、全生徒数に対する加盟生徒数の割合は、2023年で2.37%の39,023人、2020年で2.61%の43,366人より0.24%と、加盟率にして0.24ポイント、人数にして約4,000人減少するなど状況は改善されていない。

そこで、先行研究などをもとに剣道部に加盟する生徒が減少している要因を明らかにするとともに、攻防するという点で共通である球技種目の競技団体の取り組み等を参考に、少年期に剣道を普及させるための方策について検討することを目的とする。

## 2 研究の方法

本研究は、生徒が剣道に対するイメージなど先行研究をもとに剣道部加盟率が減少している要因を明らかにするとともに、下位教材の開発、用具の工夫、ルールの特化などの視点で、剣道と攻防するという点で共通の球技種目の取り組みと比較し、少年期における剣道普及に向けた方策について検討する。

## 3 中学校部活動における剣道部の加盟率の推移と主な種目との比較

日本中体連の調査結果をもとに、表1に主な競技種目の加入者数と加盟率の5年ごとの推移を示した。ここでいう加入率とは全生徒に対するそれぞれの部に加入している生徒の割合である。表2に主な競技種目の加盟校数と加盟率の

表1 全国中学生体育大会主な夏季種目における加入生徒数及び加入率の推移

男子		2002年 (平成14年)	2007年 (平成19年)	2012年 (平成24年)	2017年 (平成29年)	2022年 (令和4年)
剣道	加入者数	82424	66792	62710	52634	42027
	加入率 (%)	4.2	3.6	3.5	3.1	2.5
柔道	加入者数	43386	38032	29473	23718	17815
	加入率 (%)	2.2	2.1	1.6	1.4	1.1
バスケットボール	加入者数	196523	170817	177201	168935	165978
	加入率 (%)	10.0	9.2	9.8	9.8	10.0
サッカー	加入者数	206750	224848	248980	212239	151544
	加入率 (%)	10.5	12.2	13.7	12.4	9.1
軟式野球	加入者数	314022	305300	261527	174343	137384
	加入率 (%)	15.9	16.5	14.4	10.2	8.3
バレーボール	加入者数	74062	56912	50639	56692	60900
	加入率 (%)	3.8	3.1	2.8	3.3	3.7
ソフトテニス	加入者数	196956	175528	169059	116643	132867
	加入率 (%)	10	9.5	9.3	9.4	8.0
卓球	加入者数	166384	155726	145078	155004	145956
	加入率 (%)	8.4	8.4	8.0	9.0	8.8
陸上競技	加入者数	111600	109081	129701	126465	124412
	加入率 (%)	5.7	5.9	7.1	7.4	7.5

女子		2002年 (平成14年)	2007年 (平成19年)	2012年 (平成24年)	2017年 (平成29年)	2022年 (令和4年)
剣道	加入者数	49852	33233	38682	33210	30295
	加入率 (%)	2.6	1.9	2.2	2.0	1.9
柔道	加入者数	12491	10811	8552	7453	6571
	加入率 (%)	0.7	0.6	0.5	0.5	0.4
バスケットボール	加入者数	171168	156080	146953	135357	122601
	加入率 (%)	9.1	8.8	8.5	8.3	7.7
バレーボール	加入者数	195350	187912	161427	154844	154136
	加入率 (%)	10.4	10.6	9.3	9.4	9.7
ソフトテニス	加入者数	228638	201550	196379	176984	154298
	加入率 (%)	12.1	11.4	11.3	10.8	9.7
卓球	加入者数	96548	85906	90874	97645	88443
	加入率 (%)	5.1	4.9	5.2	6.0	5.6
バドミントン	加入者数	87821	86906	88660	87038	82175
	加入率 (%)	4.7	4.9	5.1	5.3	5.2
ソフトボール	加入者数	62487	59049	50449	39623	27406
	加入率 (%)	3.3	3.3	2.9	2.4	1.7
陸上競技	加入者数	82709	84366	92026	95972	83396
	加入率 (%)	4.4	4.8	5.3	5.9	5.3

※日本中体連の調査結果をもとに筆者が作成

表2 全国中学生体育大会主な夏季種目における加盟校数及び加盟率の推移

男子		2002年 (平成14年)	2007年 (平成19年)	2012年 (平成24年)	2017年 (平成29年)	2022年 (令和4年)
剣道	加盟校数	5923	5856	5501	5323	5154
	加盟率 (%)	53.7	53.5	51.4	51.1	50.3
柔道	加盟校数	3327	3356	3225	2990	2760
	加盟率 (%)	30.1	30.6	30.1	28.7	26.9
バスケットボール	加盟校数	7508	7265	7196	7069	6974
	加盟率 (%)	68	66.3	67.3	67.8	68.1
サッカー	加盟校数	6984	7062	6954	6897	6500
	加盟率 (%)	63.3	64.5	65.0	66.2	63.4
軟式野球	加盟校数	8945	9050	8886	8475	7964
	加盟率 (%)	81.1	82.6	83.1	81.3	77.7
バレーボール	加盟校数	4409	3490	3039	2927	2929
	加盟率 (%)	40.0	31.9	28.4	28.1	28.6
ソフトテニス	加盟校数	5783	5642	5470	5428	5479
	加盟率 (%)	52.4	51.5	51.1	52.1	53.5
卓球	加盟校数	7395	7080	6857	6664	6541
	加盟率 (%)	67.0	64.6	64.1	63.9	63.8
陸上競技	加盟校数	6627	6430	6441	6500	6465
	加盟率 (%)	60.1	58.7	60.2	62.3	63.1

  

女子		2002年 (平成14年)	2007年 (平成19年)	2012年 (平成24年)	2017年 (平成29年)	2022年 (令和4年)
剣道	加盟校数	5482	5250	5277	4857	4597
	加盟率 (%)	49.6	47.9	49.3	46.6	44.9
柔道	加盟校数	2245	2352	2303	2177	1954
	加盟率 (%)	20.3	21.5	21.5	20.9	19.1
バスケットボール	加盟校数	7486	7521	7450	7266	7071
	加盟率 (%)	67.8	68.7	69.6	69.7	69.0
バレーボール	加盟校数	9041	8717	8409	7974	7541
	加盟率 (%)	81.8	79.6	78.6	76.5	73.6
ソフトテニス	加盟校数	7609	7402	7175	6920	6766
	加盟率 (%)	68.9	67.6	67.1	66.4	66.0
卓球	加盟校数	6458	6001	5968	5964	5985
	加盟率 (%)	58.5	54.8	55.8	57.2	58.4
バドミントン	加盟校数	3518	3476	3585	3627	3722
	加盟率 (%)	31.8	31.7	33.5	34.8	36.3
ソフトボール	加盟校数	3211	2854	2650	2312	1919
	加盟率 (%)	29.1	26.1	24.8	22.2	18.7
陸上競技	加盟校数	6497	6319	6306	6416	6271
	加盟率 (%)	58.8	57.7	58.9	61.5	61.2

※日本中体連の調査結果をもとに筆者が作成

5年ごとの推移を示した。ここでいう加盟率とは全中学校に対するそれぞれの部に加盟している学校の割合である。

### 1) 男子の状況

剣道の加入率は、2022年が2.5%と、2012年の3.5%より1.0%、2002年の4.2%より1.7%と20年間で約半減している。

剣道と同じ傾向を示しているのが軟式野球で、加入率が2022年で8.3%、2012年で14.4%、2022年で15.9%と20年間で約半減している。硬式野球のクラブチームに所属している生徒が微増傾向にあることを鑑みても野球人口は減少傾向にある<sup>3)</sup>。

バスケットボールの加入率は2024年が10.0%、2012年が9.8%、2002年が10.0%とほぼ横ばいである。また、サッカーの加入率は、2024年が9.1%、2012年が13.7%と10年前より減少しているが、日本サッカー協会の調査<sup>4)</sup>によると、中学生世代の競技人口は増加しているので、地域のスポーツクラブに所属している生徒が増加していることが分かる。

### 2) 女子の状況

剣道の加入率は2024年が1.9%と、2012年の2.2%より0.3%、2002年の2.6%より0.7%と年々減少している。今回の全中大会の非開催種目として検討されたソフトボールは、加盟率が2022年度で18.7%と20%を下回っているものの加入者数は27,406人と、剣道の30,295人と約3,000人しか少ない。剣道は個人戦があることや3人でも団体戦に出場できたり、男子と一緒に練習できたりするために、加盟率は44.9%であるが、加入率は低く競技人口が多いとはいえない。今後は全中大会非開催種目にあることが予

想される。

剣道と同じ傾向を示しているのがソフトテニスで、加入率が2022年で9.7%、2012年で11.3%、2022年で12.1%と年々減少している。しかしながら、テニス（硬式テニス）部加盟校数の増加や地域のスポーツクラブに所属している生徒の増加しているため、テニスの競技人口は著しく減少しているとはいえない。

バレーボールの加入率は2024年が9.7%で2012年の9.3%より回復傾向にあり、卓球やバドミントンは微増傾向にある。

## 4 生徒の剣道に対する愛好度について

流通経済大学<sup>5)</sup>がスポーツ庁の委託事業として、中学2年生を対象に行った調査では、保健体育の授業に比べ、剣道の授業を好きと回答した生徒の割合は約20ポイント低く、女子はその傾向が強いことが報告されている。

その要因の一つとして、剣道は竹刀を用いて相手を直接打つために、ある程度打突部位を打てるようにまでは試合を行わず、基本動作の習得で授業単元が終了してしまう<sup>6)</sup>ことなどが挙げられる。現在の中学生在が幼小児期に遊びとして経験したことのないこと<sup>7)</sup>や柔道や剣道が小学校学習指導要領に示されていないことなどが考えられる。

また、中学生の剣道に対するイメージについての研究をみると、糸岡ら<sup>8)</sup>は中学2年生と3年生を対象に、単元前後の剣道イメージを測定している。授業前では、「かっこいい」「伝統的な」というイメージを持つ生徒もいたが、「痛い」「難しい」「くさい」「怖い」という否定的なイメージの記述が多くみられたと報告している。北村<sup>9)</sup>は中学生を対象に武道の授業実施

前に行った質問紙調査の結果から、「難しそう」「上手にできるか心配」「けがをしそう」という不安を窺わせる項目が上位を占めていたと報告している。このように剣道に対する愛好度は低い状況にある。

## 5 剣道の少年期の普及に向けて

### 1) 小学校への武道教育導入に向けて

#### ①安全性の確保

全剣連の学校教育部会では、先に述べた基本計画「次世代への継承に向けて」<sup>2)</sup>の中期計画の中で、「小学校への武道（剣道）導入に向けて学習内容などの素案を作成し（中略）武道協議会に提案する。」ことを目標に掲げている。小学校学習指導要領に2008年の改訂で新たに例示された「タグラグビー」と「フラッグフットボール」を参考に、導入に必要な要件について検討する。

タグラグビーはラグビー、フラッグフットボールはアメリカンフットボールを簡易化した種目である。いずれも「タックル」の代わりに、相手の腰に付けたタグやフラッグを取ることで安全を確保している。また、バスケットボールやバレーボールやサッカーなどでも、軽量ボールを開発し、入門期の恐怖心を取り除いている。

剣道は竹やカーボン素材の用具を使うため、安全性の確保という点から用具の工夫が求められる。例えば、スポーツチャンバラの長剣などが効果的である。しかしながら、スポーツチャンバラは、剣道とは違い片手での操作を認めているので下位教材として位置付けるのは難しいと考える。

日本フェンシング協会が普及用に開発したス

マートフェンシングの素材を使った竹刀など安全性の高い竹刀と簡易な操作で着脱できる剣道具の開発が求められる。

#### ②教材の有用性

文部科学省の学校体育指導資料<sup>10)</sup>には、タグラグビーやフラッグは、「ボール操作」において、サッカーやバスケットボールの技能であるドリブルがないので、中学年の児童にとってもゴール型の攻防の楽しさに触れやすいこともよさとしてあげられると示されている。小学校で剣道という教材を学ぶ価値や意義を明確にする必要がある。

### 2) 主な競技種目と類似した教材

主な競技種目の下位教材の特徴を把握し、剣道の下位教材を開発する視点を検討することとする。

#### ①野球に類似した教材

Tボールはティーの上に置いた柔らかいボールを打つこと以外はほぼ野球と同じルールで行うゲームで、体育授業でも実施されている。しかし、守備や走塁についての理解が必要であることから、日本野球機構は、野球とTボールのルールを簡略化した「BTボール」を開発した。BTボールとは、野球（Baseball）やティーボール（Teeball）のルールを簡易化したベースボール型スポーツで、守備チームは打ったボールを追いかけて捕って投げ、攻撃チームは全員が打って得点する機会があるゲームである。

#### ②テニスに類似した教材

2017年改訂の小学校学習指導要領で、中学年・高学年において、バドミントンやテニスを

基にした簡易化された易しいゲームが例示された。そこで、日本テニス協会は、「テニピン」という教材を開発した。テニピンとは、テニスの面白さを誰もが味わえるように、易しさを追究して、用具とルールをアレンジしたゲームでバドミントンコートとほぼ同様のコートの大きさで、手作り段ボールラケットや手の平を包み込むようなタイプのラケットを手にはめ込み、ネットを挟んでスポンジボールを打ち合うゲームである。

### ③バスケットボールに類似した教材

バスケットボールの下位教材としては、ポートボールが体育授業でも広く実施されている。しかし、台上の仲間がボールをキャッチすることで得点すること以外は、ほぼバスケットボールと同じルールで行うゲームである。

そこで、ドリブルを行わない「ネットボール」という教材が紹介されている。ネットボールはボールをパスのみでつなぎ、シュートして得点を競うゲームである。コートは大きく3つに区切られ、その範囲しか動いてはいけないという制限がある。選手同士の激しい接触がないこと、体力や体格に応じてポジションを選ぶことができるなどの特徴がある。

### ④フェンシングに類似した教材

用具を操作して攻防を楽しむという点で剣道と関連のあるフェンシングについては、スマートフェンシングという教材がある。スマートフェンシングとは、柔軟性のある専用の剣と導電性のあるジャケット、スマートフォン用のアプリを使ってフェンシングを疑似体験できるスポーツである。

各競技種目に類似した教材の一例を紹介したが、少年期の普及に向けて、類似した教材が数多く開発されて生きている。

ハケ代ら<sup>11)</sup>は中学生を対象とした剣道授業で、男子は授業前より授業後の方が「打ったり受けたりするなどの攻防ができるようになりたい」という剣道授業への機会の低下が認められたと報告している。つまり、攻防の楽しさを味わえなかったことを意味する。柴田<sup>12)</sup>が開発した攻防交代型のように状況判断を容易にする教材の普及が求められる。

## 6 まとめ

中学生の剣道部の加入率が年々減少している。特に女子の加入者数は、今回の全中大会の非開催種目として検討されたソフトボールより、わずか3,000人程度しか多くない。今後は全中大会非開催種目になる可能性がある。そこで、全剣連が基本計画の学校教育部会で目標に掲げた小学校での武道教育の導入を図るための条件整備について、新たに位置付けられた背景や競技人口の減少に歯止めをかけようとしている競技団体の事例をもとに、剣道を普及させるための方策について検討した。その結果、小学校の体育の授業で利用できる簡易な竹刀及び剣道具などの教具及び攻防の楽しさを味わわせることのできる状況判断を容易にした教材の普及が必要と考える。

### 〈参考・引用文献〉

- 1) 朝日新聞デジタル2024：2024年11月24日取得  
(<https://www.asahi.com/articles/ASS682GMH-S68UTQP01FM.html?msoclid=3322b594d0ff68df2d-faa614d1d269b3>)
- 2) 全日本剣道連盟：全日本剣道連盟《基本計画》次

- 世代への継承に向けて, 2022 : 1-14.
- 3) 日本野球協議会：野球普及振興活動状況調査2022【報告書】, 2023 : 6.
  - 4) 日本サッカー協会：サッカー選手登録数, 2024年11月24日取得, ([https://www.jfa.jp/about\\_jfa/organization/databox/player.html](https://www.jfa.jp/about_jfa/organization/databox/player.html))
  - 5) 流通経済大学：「武道等指導充実・資質向上支援事業に係る武道指導に関する調査」調査報告書―第五報―, 調査研究協力者会議, pp104-138, 2020.
  - 6) 柴田一浩：「ダンスと武道」の必修化で直面する課題をどう解決するか, 体育科教育, 2008, 56(6) : 40-43.
  - 7) 江原孝史：中学校武道必修化の問題と課題, 特に剣道に焦点を当てて, 教育総合研究, 2017, 1 : 209-221.
  - 8) 糸岡夕里, 日野克博, 中岡祐紀, ほか：中学校における「剣道」の授業実践－生徒の剣道イメージに着目して－, 愛媛大学教育学部紀要, 2011, 58, 137-144.
  - 9) 北村尚浩：武道必修化の課題と展望, スポーツ社会学研究, 2013, 21(1) : 23-35.
  - 10) 文部科学省：学校体育指導資料第8集「ゲーム及びボール運動」, 東洋館出版, pp82, 2010.
  - 11) ハヶ代寛子, 與儀幸朝：中学1年生を対象とした剣道授業における意識及び期待の検討－単元前後の性別比較を中心に－：武道学研究, 2020, 52(2), 119-131.
  - 12) 柴田一浩：新・苦手な運動が好きになるスポーツのコツ②剣道, ゆまに書房, pp40-43, 2013.